

セッション「疎外を問い直す」事後報告

世話人；田畑真一（北海道教育大学旭川校）

司会；田畑真一

報告者；淵田仁（城西大学）、丸山文隆（東京大学）、長門裕介（大阪大学）

討論者；田畑真一、川瀬和也（宮崎公立大学）

本セッションは、疎外という概念の意味を、個別の思想家に着目しつつ、問い直すことを目的とした。これまで疎外は、マルクスの圧倒的影響下にある概念であったが、このセッションでは、そうした理解を踏まえつつも、それとは異なる可能性を明らかにすることを試みた。こうした問い直しを試みるのは、疎外という観点から問題が語られることが現在もなお多い一方、その内実は、依然として曖昧で意味が定まっていない状況があると考えからである。本セッションでは、多様な疎外理解を確認することを通じて、疎外概念のポテンシャルを新たに探っていくことを目指した。こうしたセッションの目的を、司会の田畑が、冒頭に簡単に説明をした上で、以下三つの報告が行われた。

まず、「疎外と非疎外のあいだ」と題された淵田報告では、ルソーが生み出したとする二つの疎外論、すなわち自然状態を理想とし社会を本質的に疎外的状況にあるものとする自然回帰的な疎外論とカント的自律の思想のみならず、ヘーゲル的な自由概念にインスパイアを与えたとする疎外論とは別の仕方、ルソーのテキストを読み直すことが目指された。その作業から、ルソーを端緒とした二つの疎外論の系譜とは別のモードがあることが確認された。それは、疎外されているか／されていないかという二者択一的思考ではない、人間存在の「中途半端さ à demi」を肯定的するかのようなルソーの言説である。こうした観点から、疎外論の歴史を再検討するための新たな視座が提示され、その問い直しの方向性が提示された。

続いて、「ハイデッガーの『存在と時間』における疎外論と超越論的現象学との邂逅」と題された丸山報告では、ハイデッガーの『存在と時間』（1927年）における議論を疎外論一般との関わりのなかで特徴づけることが目的とされた。ハイデッガーにおいて、非本来性は（ヘーゲルの「疎外」と同様の）〈他人と同様のものとして自己を把握する〉という積極的な動性を意味し、必ずしも不道徳という含意をもたない。この議論はその意味で、國分功一郎のいわゆる「本来性なき疎外」と一定の共通点をもっている。だが、それに対置される本来的自己了解は、E・フッサールの「現象学的還元」と同様、一人称的な視点から存在論を基礎づけるための操作である。それゆえ、ハイデッガーの本来性は、存在論の刷新を提案するハイデッガー自身およびその提案を理解したいと思う存在論の従事者にとってのみ目指されるべきものであり、こうした点に他の論者の疎外論との大きな違いがあることが確認

された。

最後に、「疎外と人生の意味：カミュ『シシュポスの神話』と現代倫理学」と題された長門報告では、疎外概念の展開の事例として、いわゆる「シシュポス問題」の位置づけが扱われた。A・カミュが「神々のプロレタリアート」として描いたシシュポスの問題は、英語圏で「人生の意味」をめぐる問題として再解釈されてきた。そのなかでも重要なのが、D・ウィギンズによる批判である。ウィギンズは価値を投影として解釈する英語圏の人生の意味に関する議論と実存主義は同様の誤りに陥っているとして批判した。これらの批判は、疎外に関する議論を主観的な態度や投影とする議論が失敗に終わることを示唆している、と論じた。

討論においては、初めに、討論者の川瀬から全体に関わる論点として、(1) 疎外は「全か無か」の概念なのか、程度差を許すのか、(2) 疎外は否定的な意味しか持たないのか、肯定的ないし創造的な意味を持ちうるのか、(3) ローカルな疎外（個別の行為における疎外）とグローバルな疎外（人格全体の疎外）のどちらが問題になるのか、という三つの論点を提示した。もう一人の討論者である田畑からも、全体の理解に関わる点について質問がなされ、その上で、特に丸山報告に対して、ハイデッガーにおける本来性が「人称的な視点から存在論を基礎づけるための操作」を超えた規範的意味をもっているのではないかという質問がなされた。

20名を超える参加者を迎え、会場との質疑応答も活発に行われた。各報告についてそれぞれ質問がなされ、特に、淵田報告に対しては、理想としての古代ないし新旧論争という文脈を踏まえた上で、ルソーの疎外論を読み直すことが重要ではないかという質問があった。

こうした質問に対して、各報告者から個別に応答がなされ、全体として、疎外という概念を今後どのように生かしていくのかという点から、報告者、討論者、会場との間で活発なやり取りが行われた。

以上のように、本セッションは、疎外に関して、積極的な意見交換がなされた有意義なセッションとなり、疎外概念のポテンシャルを問いなおす貴重な機会となったと言える。